

四季折々の 森の植物や鳥・虫などの動物を紹介します

1. タケノコ (ふるさとゾーンで観察できます)

廃川になるまでは、ここ野洲川南流には洪水から土手を守るために竹藪が続いていました。現在は、ふるさとゾーンの一部分に竹藪がきれいに整備されて残されています。竹の種類は主に淡竹(ハチク)と真竹(マダケ)です。今の季節はタケノコが盛んに出てきます。タケノコの成長は速く、以前に「栗東自然観察の森」で測ったところ、1日に90cmを超えたので驚いたことがあります。タケノコの太さは地面に顔を出すときに決まっています、細かく詰まった節と節の間が一斉に伸びるのです。また、タケノコは地下茎でまわりの竹とつながっていて、そこから成長に必要な栄養分が送られてきます。甘い、辛い、苦い、酸っぱいの他に「えぐい」と表現される味があります。この味の代表はタケノコです。タケノコを食べるときには、この「えぐみ」をとるために十分にゆでます。このとき、米ぬかを加えると「えぐい」成分がお湯だけの場合より何10倍もよく溶け出すと言われています。さて、「えぐい」というのはどんな味なのでしょう。辞書には、「あくが強く、のどをいらいらと刺激する味」と書かれています。タケノコの「えぐみ」の主な成分は、「ホモゲンチジン酸」という物質だそうです。

注1:「地下茎」とは、地中で横に伸びる茎です。

注2:竹の種類の見分け方

モウソウチク(孟宗竹)は節が一重。

マダケ(真竹)は節が二重、上の節があまり目立たない。幹が全体に緑色。

ハチク(淡竹)は節が二重、上、下とも節がやや目立つ、幹が白っぽい。



2. オオシマザクラの葉 (公園の至るところで観察できます)

サクラの花が散り、新緑が瑞々しい季節になりました。桜餅はオオシマザクラの葉を塩づけにし、あんこの入った餅を包んだものです。あんこの甘みとうっすらと塩味が効いた葉、また、葉っぱからはおいしいような甘い香りが漂い食欲をそそります。この公園にもオオシマザクラは植えています。桜餅のこのよい香りは「クマリン」という物質の香りです。

植物は葉や幹からいろいろな香り成分を放っています。これらの香りはカビや病原菌を遠ざけたり、退治したりするはたらきがあるのです。私たちはこの香りのはたらきを防虫剤や防腐剤などとして食品の保存に利用しています。例えば、桜餅の他に、柏餅、柿の葉寿司、チマキや笹団子、赤飯の上に乗せるナンテンの葉、肉・おにぎり・鯖寿司を竹の皮で包むなどです。



3. ハルジオン (公園の至るところで観察できます)

公園の草原、水路の周辺、園路脇等に白色またはややピンク色の花をつける高さ50~100cmの北アメリカ原産の帰化植物(外来種)。春から夏にかけていたるところに群生します。主に秋に発芽し、ロゼットで越冬、よく春茎が立ちあがります。茎を切ると中空で、白い毛が密生しています。茎につく葉の基部は耳形で茎を抱きます。開花前に蕾が下向きに垂れて、ややピンク色に染まります。4月~5月にかけて多数の頭状花をつけ、種子にはタンポポと同じように冠毛があって風で運ばれます。多年草または1年草です。



4. ムラサキツメクサ (マメ科) とシロツメクサ (マメ科)



里の森ゾーンの水路を左手に見ながら、ふれあいゾーンに向かって歩くと淡い紅色の花が多数球形に集まった花序をもつ植物があります。これはムラサキツメクサです。

ヨーロッパ原産で主に牛の飼料として栽培され、わが国にも帰化している多年生の草本です。茎は高さ70cmほどになり、葉は先がとんがった卵形の3小葉です。春から夏にかけて花をつけます。

一方、芝生広場などに白色の蝶の形をした花を多数球形につけているのがシロツメクサです。葉はムラサキツメクサと同じように3つの小葉に分かれています。それぞれの小葉の先端部には白色の線状の斑点が出るので白い爪の草という名前がついたと思われませんが、じつは江戸時代にオランダからガラス容器などの荷物に詰め物として使われたところから白い花をつけた詰め草が名前の由来です。

シロツメクサも明治時代に牛などの家畜の飼料作物として盛んに各地に導入され、各地で見られます。

一般に、クローバとよばれています。4枚の小葉をもつ葉は「幸せを呼ぶクローバ」として大切にされます。

芝生のなかに侵入して、シバと競争をしながら次第に勢力を広めどんどんマット状に広がっていくので芝生の維持管理には駆除するのに人手がかかり厄介な植物です。長い花茎を出すので子どもたちが、たくさん摘んで花輪を作って遊びます。

5. ヒバリ (スズメ目ヒバリ科)



スズメより大きく、頭頂部の羽毛をよくたてます。全体的に茶色地で、胸には黒い縦班があります。春から夏にかけて、パイチクパイチクとやかましくさえずりながら上空高く舞い上がります。ヒバリは警戒心が強く、空から地上に降りるときは、いきなり巣に戻るのではなくわざわざ数10mも離れた場所に着陸し、巣を敵から守ろうとします。「日の晴れた時」に空高くのぼって鳴くので「日晴」が本当の名前だと言われますが、今日では「雲雀」と書かれるようになってきました。産卵する月は3月から7月で、2～5個の卵をうみます。主な食べ物は昆虫、草の種子です。

6. ツバメ (スズメ目ツバメ科)



ツバメがかるやかに空中を飛翔する姿を目にすると初夏の訪れを感じます。ツバメは秋・冬は東南アジアの国で越冬し、日本など北半球の広い範囲で繁殖する夏鳥です。翼が大きく長い尾を巧みに操り急旋回して、飛んでいる虫を捕らえて食べます。口喉に赤い色があるのが見分けるポイントです。電線などに止まって「グチュグチュビチビチ・・・」と延々と鳴き続けます。

泥や枯れ草を使って人家の軒下や屋内に巣を作ります。エサはカ、ハエ、メイガ、カメムシ、ウンカ、ゾウムシなど稲作の害虫を食べるので益鳥として大切にされてきました。最近では農村地帯でエサとなる虫が農薬散布で減少したこと、人家の造りが洋風に変わって巣作りが出来ず、ツバメの数も年々少なくなりました。ツバメは巣を作る前に3日ばかり、その家に入ります。きっと巣作りに適しているのかどうかを確かめているのでしょうか。昔から、ツバメが巣を作る家は幸せになるといわれてきました。